

猫プーのなかでのぼく

猫プー通年講師(昭和音楽大学短期大学部助教授)

西村 美東士

猫プーが始まって6年が経った。ぼくは、毎年度、猫プー記録集『いなほ』で、次のように「ぼくにとっての猫プー」を書き続けてきた。

一九九二年度 「猫プーは出入り自由の“こころのネットワーク”だーぼくと猫プーの関係」

1 プーターローの自由な精神を求めて、

2 アイデアはバラバラだけれど、そのひとつひとつが宝物

3 プーターローの自由のつらさ

4 撤退じゅうのネットワークにおける「深い撤退」

5 出入り自由の淋しさを受容する

6 狛江市にとっての「流入青年」たち(を歓迎する)

7 キャンプは夜だ

8 青年が自分のお金を払う時

9 空白のプログラム

10 猫プーは癒しのネットワークである。

一九九三年度 「猫プーはどうしてネオ・トラなのか」

1 ネオ(新しい)でトラ(伝統的)な猫プー

2 アイデアばらばらなこった煮の年間計画

3 いかにもトラ(伝統)的な猫プー

4 猫プーのネオ(新しさ)は、どこにある？

5 これからのネットワーク社会を担う人間の育ち方

6 猫プーはノリのよい狛江だけでしかできないものか？

一九九四年度 「初めての人のための“猫プーとは何か”」

1 ヒエラルキーを蹴飛ばすプーターローの「自由な遊び心」

2 自分の人生をていねいに大切に生きたいという「ミーズム」の肯定

3 善と悪、薬と毒の混在するアンビバレンツな人間尊

台への関心

4 共生社会創造のための公的サービス

5 いい男、いい女さえ支援すればよい

6 おわりにー癒しと成長、受容と変容の循環

一九九五年度 「“おうち”としての猫プー」猫プーの公的・現代的意義」

こりかたまって抑圧されたぼくの思考が、「猫プーはおうちだ」という言葉によつてすると解き放たれていった。ああ、そうだ、そういえば「おうち」というのは、どんなに大人になつたっていつまでも必要だ。」「おうち」も「外の世界への参加」も、どっちもすてきなものになればよいのだ。

一九九六年度 「いい世界だよ」

「猫ブー」といういい世界とたまたま出会ったと思えばいい。こういう世界のよさを知らない人に対しては、その人は知らないというだけの理由なのだから、抗弁したり避難したりすることもない。でも、「こんなにいい世界があるんだよ」という「提案型」のメッセージだけは、猫ブーからこの競争社会に送っていききたい。また、この上下競争社会のなかで水平異質交流の居心地のよい共生のサンマの内実をつくりだしている主体は、猫ブーというシステムでもなければ、担当職員やぼくでもない。たまたま「今、ここで」集まっている人たちが創り出しているのだ。もちろん、だからこそ、こわれるかもしれない危うい存在である。だが、今のところはそれぞれの人が、このいい世界の作り手の一人である。

上の最後にあるように、猫ブーの作り手は「たまたま」今、ここで「集まっている人たち」である。でも、ぼくだってそこにいた。このぼくはどんな価値をもっていたのか。年間講師としてのぼくの役割については、すでに、「ミニ・ヒエラルキー形成の阻止」として、そのために①ニューカマー（新規参加者）をさっそうと主役にする、②もうすでに歩いている人よりも、これから足をおすおすとの踏み出す人として歩いている人の「初めの一步」を支援し、評価し、気を楽にさせる、③撤退を望む人には、さわやかに深く撤退できるように仕向ける、の3つを留意点として挙げてい

る（一九九三年度）。そこで、ここでは、ぼく個人の態度等が猫ブーの雰囲気づくりに与えた影響をまとめておきたい。

先日、大学の授業の締めくくりにあたり、2年間おつきあいいただいた短大2年生に「mitoticの授業の印象」に関する自分個人にとつてのキーワードを一人ひとり出してもらった。これをまとめたものが本図である。図を見て気づくように、そのほとんどが、態度や雰囲気に関するものである。単位認定に結びつかない猫ブーにおいては、なおのこと、それがぼくの存在の意味だったといえるのではない。子どもっぽくて寂しがり屋のぼくではあるが、それだからこそ現代社会の、そして人間存在の、孤独な宿命のなかで、ぼくなり役に立つことができたのだと思いたい。（参照 自著『癒しの生涯学習—ネットワークのあじわい方とはぐくみ方』学文社、1997年4月）



mito的授業の印象 (1998年1月 最後の授業にて)

